

## 松下国際財団 研究助成 研究報告

【氏名】 白海提(バフティヤール・イスマーイール)

【所属】(助成決定時) 京都大学文学研究科

【研究題目】 17世紀初頭に著された中央アジアのナクシュバンディー教団・イスハーク派の  
聖者伝『心の光』に関する研究

### 【研究の目的】

本研究は、イスラームの聖者として16世紀後半の東西トルキスタンにわたって活躍した、ナクシュバンディー教団のシャイフであるホージャ・イスハーク・ワリー(以下はイスハークと称する)という人物の聖者伝『心の光』を考察し、彼と彼の党派イスハーク派の宗教的・政治的な活動を検討するものである。17世紀初頭にペルシア語で著されたこの聖者伝は単なるイスハークの奇蹟やエピソードの集成ではなく、当時の中央アジア・イスラーム社会の様相、特にナクシュバンディー教団の宗教・政治活動および内部紛争を反映する史料であり、後世の聖者伝の作家に大きな影響を及ぼした重要な作品でもある。本研究の目的は、この聖者伝を全体的に分析し、従来言及されなかったその史料としての性格や構成上の特徴を明らかにし、16世紀後半の中央アジアの政治的・社会的背景にあったイスハーク派とその創始者の活動を多様な視点から考察することである。

### 【研究の内容・方法】

一、ハーバード大学での史料調査：『心の光』の校訂テキストの作業および内容の検討を厳密に進めるために、ハーバード大学に所蔵されている当史料の写本の原物を実見する。また、先行研究の成果を正確的に把握するために、かつてこの写本を紹介・利用したイスラーム神秘主義研究の大家、故ハーバード大学の J.F.Fletcher 教授が残したナクシュバンディー教団関連史料および氏の未公開の研究手稿、文献コレクションを調査する。

二、新疆での史料収集：中国の新疆ウイグル自治区のカシュガル、ヤルカンド地方の民間ではナクシュバンディー教団とイスハーク派を含む「カシュガル・ホージャ家」に関する未公開の写本史料が所蔵されており、中に現代に書かれたものも存在する。これらの新しい史料の収集・利用はナクシュバンディー教団の現代新疆ウイグル人社会に及んできた影響を検討する上で重要な意義を有する。本研究は新疆地域での史料収集をも重要な一作業として進めていきたい。

三、校訂テキストの作成：『心の光』の構成や成立問題、史料の性格、および他の史料との関係などの問題を分析するために、その全体の内容を把握すべきである。ところが、この聖者伝の各バージョンのペルシア語とチャガタイ語写本の内容は必ずしも一致しない。『心の光』の元々の内容に近づけるために校訂テキストの作成は唯一有効な手段である。

四、歴史的考察：『心の光』を検討する上で、ナクシュバンディー教団イスハーク派が成立した前後の当時の中央アジアの政治、社会状況、ナクシュバンディー教団内部の各勢力の対立実態、イスハーク派の諸活動及びその特徴、現代に至ってイスハーク派の歴史や系譜がどのように理解され、伝えられてきたのかと言った一連の歴史問題を考察する。

### 【結論・考察】

一、『心の光』は単なるイスハークの奇蹟を記録する聖者伝ではなく、16世紀後半の中央アジアの政治状況、及び当時のナクシュバンディー教団の内部紛争を反映するものであると同時に、イスハークのイスラーム的聖者像を定着させ、彼がナクシュバンディー教団の精神的系譜の正当なる後継者であることを強く主張する作品である。

二、当聖者伝をイスハーク派と対立していた別の宗教勢力の史料との比較研究により、イスハークが宗教的な活動を行なったのみならず、自らの教団後継者としての地位を樹立するために、当時の世俗支配者の政治にも積極的に関与し、今後のイスハーク派の発展、特にその新疆へ進出し、宗教的・政治的な基盤を築くことにおいて大きな努力を見せたという結論に達している。

三、現地調査で収集された史料から見ると、今日の新疆のムスリムの間ではこの16世紀のイスラームの聖者の歴史像に関して従来の通説と異なる様々な記録が残されている。この事実は正に歴史上イスハーク派がほかの宗教勢力と敵対し、そして世俗政権と深く関係していたという複雑な実態を反映している。今回の現地調査を通じて、今後、新疆では新たな史料をさらに収集することが可能であると理解されている。現在、筆者はこの聖者伝に関する校訂テキストの作業を進めており、研究成果を近い内に提出する予定である。